

# たまびコンペティション 講評

川添史子

鑑賞者が自由に“公園”を回遊する野外上演『ココトエンパシー』は、随所に摩訶不思議な可愛らしさや世界観を感じる作品。ただ、もう一步観客が能動的に参加でき、「こういう楽しみ方ができるのか!」と入り込める仕掛けが欲しいと感じます。観劇経験がない、携帯電話を切るのが不安、数時間客席に縛られるのが苦痛、小さな子ども連れなど、通常劇場と縁のない／遠ざかってしまうあらゆる人を優しく受け入れる柔らかい間口の広さを感じるので、新しい観客との関係構築に期待します。

起承転結の物語を展開するのではなく、「集って歌う」行為そのものを演劇にした『合唱』は、その大胆なコンセプトに面白さを感じました。「太陽は23才」などといった歌詞でパッと宇宙の視点が入り、俯瞰のアングルが挿入されるようなところも巧い選曲。一人ひとりの説明となるオープニングがステレオタイプな言葉やポーズではなく、その人の個性がにじみ出るものであれば、肝となる合唱のハーモニーに繋がったのでは……と思います。服を脱いで全く違う身体が見える「着脱」場面の方が、一人ひとりの存在を強く感じられました。

食事や料理の風景を日常的な会話で切り取った『鍋底』は、一見、いわゆるスタンダードな「演劇」なので、始まった数分は「あ～こういうの見たことある」と分類しそうになりました。が、他愛ない言葉が詩的で繊細、照明や衣裳にも細やかな仕事を感じ始め、幸福や恋愛についての考察という普遍的かつ大きなテーマを扱っていることにも好感を持ちました。役者が入れ替わっていくのは若干の分かりにくさが。整理して構成すれば、もっと重層的な意味が見せられた気がします。

登場人物4人それぞれの心の声を聞くような『ラジオ体操を明日、』は、ユーモア漂う愛らしい作品。カップ麺をすすったり、小さな机をぐるぐる回したり、ナンセンスなセリフを叫んだり、なんでもない動きや場面がなんともチャミング。遊び心溢れる衣裳や小道具、絵作りも楽しい。随所にイメージとして使われた「和の音」ですが、邦楽は太鼓の叩き方ひとつにも意味があったりと、ピッタリ合う場所に使うともっと深みや広がり、洒落っ気が生まれる表現です。ぜひ調べてみてください。

全ての作品を通して使用された舞台美術は、どんな世界にも対応できるデザインでありつつも、「無難」にまとめない強さを感じました。

どれも既成の舞台芸術の枠に捉われない、伸びやかさのあるオリジナリティの高い作品ばかり。とても楽しく拝見しました。いずれは劇場公演を——という方もいるかと思います。正直そこに至るまでは、技術面・作品の練り方・核の据えかた……などなど、今後かなりのステップが必要でしょう。が、その自由な感性を生かし、見知らぬ観客と時間／空間を共有する、意味や喜びを粘り強く考えていってください。

今は自分たちの感覚や衝動を土台にした「等身大」こそ正義だと思いますが、クリエイションを繰り返していくなかで、遠くの他者、世界にも好奇心のアンテナを広げる日がくるでしょう。その時、古今東西の古典や演劇史／芸術史から学べば、教科書

としてだけでなく、先人の試行錯誤に励まされ、背中を押されるはずです。

卒業後は舞台芸術とは違う道を選ぶ方もいると思いますが、創作の喜びや苦しみを  
知るみなさんは、表現者にとってこの上ない心強く厳しい観客、仲間です。社会に出  
ても劇場に足を運び、シーンの一端を担って行ってください。